実践が深まる大阪モデル

全国が注目、三位一体の地域福祉「八尾市での取り組み」

連携の力で、心つながる福祉のまちへ。

大阪府内の社会福祉法人が連携し、地域の困りごとに向き合う取り組みとして「大阪しあわせネットワーク」が展開されています。これは、大阪府社会福祉協議会と会員の社会福祉法人（福祉施設）が協働し、福祉サービスの充実・向上にとどまらず、それぞれの専門性や拠点性を活かした地域貢献事業を府域全体で推進していく取り組みで、社会福祉法人同士が力を合わせ、地域の課題やニーズに応えながら、一人ひとりのしあわせを支えていくことを目指しています。

「大阪モデル」はこうした取り組みをさらに地域の実践へとつなげる運用モデルで、行政と社会福祉法人、そして地域が協働することで、制度だけでは対応しきれない生活課題にも柔軟に対応できる包括的な支援体制の構築を目指しています。

そんな大阪モデルの中でも、特に注目を集めているのが八尾市の取り組み「八尾モデル」です。八尾モデルの特徴は、複数の施設が連携して支援にあたる点にあります。市内を三つのエリアに分け、それぞれに施設のコミュニティソーシャルワーカー（CSW）と社協職員によるチームを編成。相談が入ると、輪番制の代表施設に連絡が入り、代表施設のCSWが他施設と情報を共有します。原則として二つ以上の施設が連携して訪問・支援にあたることで、負担を分担しながら多角的な視点で対応できる仕組みとなっています。

「複数の施設で対応することで、負担が偏らず、多角的な視点で支えられるのが八尾モデルの大きなメリットです」とCSWの久保田さん。DVのケースでは男女ペアで訪問するなど、状況に応じて専門性や役割を分担できる点も強みです。こうした連携体制の背景には、社会福祉法人同士の信頼関係と地域を想う強い気持ちがあり、互いに支え合いながら地域の課題に向き合うこの仕組みが、八尾の地域福祉を支える大きな力となっています。

それぞれの経験を交え、地域福祉の未来を語る。

CSW: 久保田 佳宏さん
▼（サポート八尾）

▲CSW: 大藤 直子さん（信貴の里）

支援の対象は“生活に困っている人すべて”。

八尾モデルが目指しているのは、制度の枠にとらわれない包括的な支援で、「生活に困っている人すべて」を支援の対象としています。現場では、ケアマネジャーや社会福祉士、看護師など多職種の職員が、本来の業務と両立しながら活動しており、居住環境の整備や各種手続きのサポート、食料や日用品の提供などを通して生活再建を支えています。このような支援を通じて「手を差し伸べてくれる人がいる」と気づき、そのことがきっかけとなって生活保護から自立へと歩み出した事例も少なくありません。

また、支援を受けた人が地域活動に参加し、“支える側”として関わるようになる好循環も生まれています。「小さな支援でも背中を押せることを実感しています。地域のつながりの大切さを学びながら、次の支援につなげていきたい」とCSWの竹渕さん。

「支援はつながりの始まりです。関わった人のその後を見守り続けるのが八尾らしさ。そうした関係が地域の安心につながっていると感じます」とCSWの秋田さん。支援は一度きりで終わるものではなく、人と人の関係を育てながら続いていくものだという思いが、現場には息づいています。

▼CSW: 秋田 将幸さん（ホーム太子堂）

▲CSW: 竹渕 文亮さん（あすか八尾）

「八尾モデル」のバージョンアップで多様化する課題に対応。

近年、8050問題をはじめ、複数の課題を同時に抱える世帯が増え、地域福祉の課題を一つの機関だけで解決することが難しくなっています。こうした状況に対応するため、八尾モデルは現在、新たな段階「バージョン2.0」へと進化を続けています。

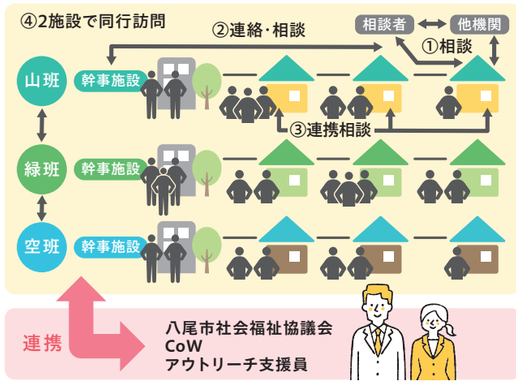
令和6年からは、障がい・保育・児童分野のCSWやスマイルサポーターも連携体制に加わり、中間的就労[*1]や居住支援[*2]の担当者とも連携を開始。社協が支援の調整役となり、社会福祉法人の地域貢献事業や行政の施策と連携しながら、多様な支援をつないでいく仕組みが整いつつあります。

「複雑な課題を解決するためには、行政・社協・社会福祉法人が一体となる“三位一体”の連携が必要不可欠。これからも社会福祉法人の地域貢献事業と力を合わせ、連携の輪を広げていきます。」と八尾市社協の前川さん。行政の制度、社協の調整機能、そして社会福祉法人の専門性や現場力。それぞれの強みを活かした協働こそが、八尾の地域福祉の大きな特徴です。

八尾市社協 石川さんは「自治会や民生委員などで構成されている大阪の『宝』である地区福祉委員会やボランティアなどさまざまな地域団体の力と社会福祉法人の強みを発揮し合えば、解決できる地域課題は少なくない。」と語り、今後も大阪しあわせネットワークの取り組みとも呼応しながら、地域のさまざまな主体が力を合わせて制度の狭間にある課題にも対応していきたいとの考えを示しました。

「八尾市民はみんな“おせっかい”なんです。」と笑うCSWの皆さん。ここでいう“おせっかい”とは、困っている人を放っておかず、自然と手を差し伸べる思いやりの心のこと。八尾市では人々が互いに気にかけ、声をかけ合う文化が日常の中に根づいており、その温かなつながりが地域福祉の基盤となっています。

複数の施設が連携して支援にあたる協働体制、社協による包括的な支援調整、そして地域団体や行政との連携。こうした“つながり”を地域全体の仕組みとして築いてきたことこそが、八尾の大きな強みです。八尾モデルはこれからも進化を続けながら、「おせっかい日本一」ともいわれる地域の力を活かし、誰ひとり取り残さない福祉の実現を目指していきます。



*1 中間的就労：心身の不調や長期のブランクなどにより、すぐに一般就労が難しい方が、支援や配慮を受けながら働くことを通して、社会復帰や自立を目指すための働き方を支援。
*2 居住支援：住宅確保要配慮者（病気や高齢、経済的な理由などにより住居の確保が難しい人々）に対し、住まいの提供から入居後の生活サポートまでを一体的に行う支援。

声を掛け合い、支え合う。
目指すは「おせっかい日本一」。

八尾市社会福祉協議会 社会福祉施設連絡会
八尾市本町 2-4-10 八尾市立 社会福祉会館 TEL: 072-991-1161

取材協力 あすか八尾、サポート八尾、信貴の里、ホーム太子堂、八尾市、八尾市社会福祉協議会

社会福祉法人 大阪府社会福祉協議会 施設福祉部 社会貢献推進室
大阪市中央区中寺 1-1-54 大阪社会福祉指導センター TEL: 06-6762-9488
www.osaka-shiawase.jp